

A 203 小児期における給食の実態(予報)保育所給食の都市比較

甲子園短大 富田絹子 ○西田美枝子
山下慶子

目的 前報に報告したごとく公立保育所給食食構成は、自治体保育担当部門で作成されるので、当然都市により異なり、ひいては栄養量にも多少の相違がみられるのではないかと考え、A市 N市の給食栄養量および食構成について比較を行った。結果を保育所の地域別栄養指導の一資料としたい。

調査方法 対象 昭和55年度1年間のA市、N市保育所給食 A市303日 N市293日
1~2才児 3~5才児分について調査した。A市のは前報の55年度分、N市についても給食献立表より前報と同様の食品群に分類、栄養素10項目を算出し、年令別、季節別の年間 \bar{x} 、SD、CV を求めた。

調査結果 給食栄養量の年間 \bar{x} は両市ともFe量が少ないほかは厚生省基準量を充足している。両市間で1~2才児はA市が熱量 糖質 Ca VB₁ V.C Feが高く($P>0.01$) 3~5才児はN市が熱量 糖質 たん白質(全) Fe V.A. B₁ B₂ Cが高値($P>0.01$)を示した。V.Aを除く栄養素量のCVはおおむね低くそれぞれ栄養摂取量に変動の少ないことを示した。食構成では1~2才児でA市の高値を示した($P>0.01$)のは、穀類、小麦、芋類 砂糖類 その他の野菜類、肉類 乳類、その他の食品で、N市が高値を示したのは($P>0.01$)米 菓子類、豆類 きのこ類 調味料嗜好飲料 魚介類であった。食品群CVは両市とも種実類 きのこ類 海藻類、その他の食品が著しく高かったが、乳類、米 卵類 野菜類 果実類 菓子類は比較的低く、使用量に大きな変化のないことを示した。